唐招提寺蔵『六大無導義抄』二帖（二）

――下帖影印並びに内容解説――

花野憲道

目次

三、成立事情と構成
四、国語学的考察
五、おわりに

三、成立事情と構成

1、成立事情

唐招提寺蔵『六大無導義抄』には上下各帖に「方便智院」朱印が押され、上帖表紙に「栂尾方便智院本」としるされており、本書が高山寺方便智院旧蔵であったことが知られる。本書の撰述者順性房高信は先にその血脈を示した通り(1)明恵上人の弟子であり、師明恵の影響が多大であることは想像に難くない。

そこで先ず、明恵が密教関係佛典について何を書写・講義を行ない、伝授していたかを見てみよう。

『加持温病法』一巻・『大寶廣博樓閣善住秘密陀羅尼念誦次第』一巻・『光明真言加持土沙義』一巻・『六秘密佛光合行念誦次第』一巻などの撰述、『大日経疏』の講伝、「寶樓閣法」・「大佛頂法」・「五秘密法」・「光明真言法」などを伝授し、

「五相成身観」・「阿字本不生」などを談じている。(2)

それでは順性房高信の場合はどうであったか。

高信に関しては本書『六大無導義抄』の撰述が知られる程度で、『六大無導義抄』の講義やその記録も現在のところ見出していない。高信の教相面全般の活動実態に就ては、既に納富氏の御論説に詳述されている。(3)

それによれば『解脱門義聴集記』の類集、『華厳文義綱目』・『五教章類集記』の講義等が行なわれている。これらはいずれも華厳宗関係の教相である。従って高信が密教奥義の教相を説いた『即身成佛義』の疏釈を著したことは、高信の教相や師である明恵の教学を知る上で極めて重要な位置を占めると考えられる。

『六大無導義抄』には多くの経論や師説を引き、更に他宗の教学と対比させて自説を述べている部分も認められる。先ず、引用経論として具体的に書名の見出せるものは次の如くである。但し、書名を表出していなくて引用されている経論も存する可能性はある。

『大毗盧遮那成佛神変加持経（大日経）』・『金剛頂一切如来真実摂大乗現證大教王経（金剛頂経）』・『仁王護国般若波羅蜜多経（仁王経）』・『大方広佛華厳経』・『菩薩瓔珞本業経』・『大毗盧遮那成佛経疏（大日経疏）』・『即身成佛義』・『秘蔵記』・『菩提心論』・『即身成佛義釈』・『仁王般若陀羅尼（秘）釈』などであり、大部分が密教の経論である。

次にどのような意識で宗派を区別しているのか、その該当語句と思われるものを次に掲げて比較してみたい。

①、高信の属している宗派を示していると思われるもの。

〔上帖〕

我宗……17-ウ 2・20-ウ 8　他

自宗……20-オ 2・21-オ 2　他

秘教（宗）……33-オ 2・58-ウ 5

〔下帖〕

自宗……2-ウ 8・3-オ 2 他

我宗……3-ウ 6・17-オ 6 他

當宗……12-オ 3

秘宗……15-ウ 8

②、①以外の宗派を示すと考えられるもの。

〔上帖〕

顕宗（家）……14-オ 8・14-ウ 3 他

真言（家）……15-オ 2・17-ウ 8 他

法相（宗）……15-オ 5・34-ウ 7

三論……15-オ 6

天台……15-オ 6

華厳（宗）……15-オ 7・20-オ 1 他

他宗……21-オ 2

〔下帖〕

真言（家・教）……1-オ 3・15-ウ 4 他

顕家（宗）……7-ウ 7・12-ウ 3 他

天台……24-ウ 2・42-オ 1

華厳……　24-ウ 3・42-オ 1
他宗……　2-ウ 8・11-ウ 5　他

③、①と②とを対比させている文も認められる。

〔上帖〕

汝離顕宗所談事理等法相欲談真言一宗之事理（14-ウ 3～4）
凡法相廃詮談旨。三論八不中道。天台一心三観。華厳果性不可説。真言三密平等等之義、（15-オ 5～7）
顕家覚自心本不生、……我宗意纔発一念不生心（46-オ 8～46-ウ 1）

〔下帖〕

是皆以顕家漸次之位地顕秘宗頓成勝徳（15-ウ 8～16-オ 1）
顕家者一向約観智力真言兼運三業行（25-オ 8）
顕家一乗、以煩悩……天台立性惑華厳於一瞋煩悩……況真言教……（41-ウ 8～42-オ 2）

斯様に、明らかに高信の属している宗派とそれ以外の宗派とを区別して、対比してとらえていることがわかる。高信は広沢流を明恵より、勧修寺流を定真より受け、更に文暦二〈一二三五〉年には高山寺阿弥陀堂に於て行遍を阿闍梨として伝法灌頂を受けている。高信は真言密教の二相を双修した已達であったのである。(4) それは、高信の教相（ここでは即身義の解釈に関して）が既存の宗派の教相と異なることを示しており、更に加えて高山寺の教学もそのようであったろうと推察できるのである。

ここに真言宗開祖空海撰述書の中で、最も真言密教の深秘な教義を要説した『即身成佛義』に着目し、高信がその疏釈を撰述した意図が存するように考えられる。

既に述べた如く、本書は元来仮名書きで成立したことが奥書に記されている。高山寺関係の典籍文書の中では『高山寺明恵上人行状』に「仮名行状」と「漢文行状」が存することは知られている。それら「仮名行状」と「漢文行状」との成立関係は次の様に指摘されている。

「漢文行状」下巻末の奥書は次の通りである。

「依蒙　仰高山寺明恵上人高辨
行状粗注進之以義林房喜海
和字之記録爲本依義林房申置以法印權大僧都隆澄成漢字畢所下賜記少々相加之矣
建長七年乙卯七月八日沙門高信」(5)

喜海の撰した仮名行状を隆澄が漢訳し、更に高信が加筆して成立したものである。

しかして順性房高信の著作類の中で仮名書きで成立したと思われる著作は本書以外に存するのであろうか。

高信が成立にかかわった撰述書や著作の主なものを掲げてみると次のようであり、仮名交り文の多いことが知られる。

『高山寺縁起』……漢文
『解脱門義聴集記』……漢字仮名交り文
『光明真言句義釈聴集記』……漢字仮名交り文
『栂尾明恵上人遺訓』……漢字仮名交り文
『密一事』……漢字仮名交り文

元来、三蔵（経・律・論）と称される佛典は当然ながら漢文体で記され、日本に於て撰述された三蔵の疏釈類も漢文体であった。それらは僧侶以外では、漢文読解能力を備えた極く限られた人以外には接することも解することも不可能であった。一般の識字層が序々に広がりつつあっても、漢文体よりも仮名書き体の方がより庶民に対しては一般性が高いと思われる。このことは、佛典が仮名書き体に改められている例でも認められる。(6)

「妙法蓮華経」→妙一記念館蔵「仮名書き法華経」
「観無量寿経」→知恩院蔵「仮名書き観無量寿経」
「阿弥陀経」→「仮名書き阿弥陀経」
「往生講式」→随心院蔵「仮名書き往生講式」

これら仮名書きにされた佛典はいずれも浄土教関係の佛典である。

浄土経典のように一般庶民に関わりの深い経典を仮名書きにする事情は理解出来る。ところが、密教経典、それも真言密教の深意である即身成佛を説いた即身義に、敢て仮名書きの疏釈を著す必要性はどこに有るのであろうか。

それについては、高信自筆「仮名書き祖本」の存しない事が最も憂慮される点ではあるが、次の如く考えられる。

本書の奥書に「依一人之懇請卒爾草之畢」「其後依同侶勧進成真名畢」とあることより推して、高信が早急に「即身義」或いは「即身成佛」に就ての見解・教説を記す必要に迫られ、漢字よりも書写速度の早い仮名を用いて一気に草した。そののち疏釈の本来の姿である漢文体に改めた。従って文章も段落などを設け視覚的に判断しやすく構成したものではなく、追込式になっている。そして奥書の終りには「遂可再治之也」と高信の希望を記している。

2、本書の構成

書名に使用されている「六大無導」とは、地・水・火・風・空・識の六大体性が一切の有情非情の諸法に周くゆきわたり、同類異類の二種の無導が不二一体となる意[7]であり、『即身成佛義』の最も重要なテーマを韻文化した偈文（即身成佛偈）より採られている。

本書はその偈文二頌八句について各句毎に詳釈したものであり、主に問答形式をとり入れて綴られている。上帖は特に二頌八句の総釈と逐語訳である。

六大無導常瑜伽（2-ウ3～21-ウ1）
四種曼荼各不離（21-ウ2～24-オ2）
三密加持速疾顕（24-オ3～28-ウ7）
重々帝網名即身（28-ウ8～30-オ3）
法然具足薩般若（30-オ4～33-オ2）
心数心王過刹塵（33-オ3～35-ウ8）
各具五智無際智（36-オ1～37-オ6）
円鏡力故実覚智（37-オ7～59-オ5）

下帖は上帖を考慮し教相に停まらず事相面をも加えた論釈と考えられる。よって高信の思想や高山寺の教学面がより強く表出した部分であるといえよう。

四、国語学的考察

ここでは元来仮名書き文であったことを伺わせる語彙について考えてみたい。

〔有増（アラマシ）〕

世出世之有増者費下　随分々一之思上不遂其望一（下49-ウ3）
隨分名利ハ貴賤皆同。然者等一閑有一増事隨其身之品一（下49-オ4）
无縁衆生云一何結中因縁上云有一増事心更難廻一（下49-オ7）

「アラマシ」は「計画」とか「概略」という意味で用いられており、「有増」は宛字と考えられる。和文語としては『源氏物語』に用例が見出される。

更にかけてとあらばかゝらばなど行く末のあらましごとに取りまぜて（總角）
たゞ亡からん後のあらましごとを明け暮れ思ひ続け給ふにも（總角）

〔射取〕
如下世間箭能射中取上遠物上（下17-ウ3）

「イトル」も和語として『源氏物語』に用いられている。
柳の葉を百度あてつべき舎人どものうけばりて射とる無心なりや（若菜下）

〔源従〕
一々上疑問、源従此等義起也。（下26-ウ4）

やはり『源氏物語』に用例を認めることができる。
いとゞあはれと御覧じて後涼殿にもとよりさぶらひ給ふ更衣の曹司を（桐壺）
なりのぼれどももとよりさるべきすぢならぬは（帚木）
宮をばことに思ひ出で聞え給はずもとより見ならひ聞え給はで（若紫）

〔无端（アチキナシ）〕

何无端（ソアチキナクモ）致（シテ）於疑滞（ヲノミ）欲（スル）失（セムト）佛本懐（ヲ）（下7-オ2）

我心（カハ）不尒（スラ）无端（キノニキル）世中可有様（ニテ）而有（アラムト）。（下48-オ4）

形容詞「アチキナシ」は和文語として『古今和歌集』や『かげろふ日記』などに用例がある。

ほとゝぎすはつこゑきけばあぢきなくぬしさだまらぬ恋せらるはた（古今集　夏歌　143）

よろづよをのべのあたりにすむ人はめぐる〳〵や烠をまつらん　などあぢきなく　あまたにさへしゐなされて（かげろふ日記中）

以上の如く極めて少数ではあるが、本書の全訓附訓字の中には通常佛典で常用されている語彙以外に和文特有の語彙も認められる。このことは高信の仮名書き祖本を漢文体に改める時点で、通常漢字では表記し得ない和語であって、これを宛字で表記し全音節附訓を附したものと考えられるのである。

五、おわりに

本書はいくつかの仮名書き佛典の如く、教説の広い普及を願って仮名書きで表記されたものではないと考えられ、それらの仮名書き佛典とは異なる位置付けが必要であろう。そして本書は高山寺教学の特色を数多く含んでいると思われ、その全体像を明確に示すことにより鎌倉初期の佛教学史上に於て一つの教学（学派）の存在を指摘することも可能と考えられ、又『即身成佛義』の教学的研究史に関しても極めて貴重な資料となると考える次第である。

注

(1) 拙稿「唐招提寺蔵『六大無導義抄』二帖（一）」（『鎌倉時代語研究』第十五輯　平4・5）。
(2) 奥田勲『明恵　遍歴と夢』（東京大学出版会、昭53・11）、大山仁快「高山寺聖教目録より見た高山寺の佛教」（『高山寺資料叢書、高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会、昭55・12）。
(3) 納富常天「高山寺教学の展開」（『印度学佛教学研究』第32―1、昭58・12）。
(4) 納富常天「解脱門義聴集記解題」（『金沢文庫研究紀要』第四号、昭42・3）。
(5) 『高山寺資料叢書、明恵上人資料第一』（東京大学出版会、昭46・3）。
(6) 拙稿「随心院蔵仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻」（『鎌倉時代語研究』第十三輯）参照。
(7) 小田慈舟『十巻章講説』上巻（高野山出版社、昭59・5）。